

誕生月といふものは、本來は目出度く樂しき月と覺えがちなるが、往々にして色々なる事起こる。五月後半、空氣感染する胃腸炎患ひ、腹痛と熱に見舞われたり。そは三日にて完治す。しかれども三日後、再度腹痛に襲はれ友人の醫師よりCT等完備す病院にて診察受くるやう勧められ、日曜日のため近隣の比較的大きな病院へ赴く。醫師曰く膽のう炎症しており、水も溜まりたるに、この場合七十二時間以内の手術妥當なりとの診断下る。生まれしより、身體にメス入れし事なく、親しらずの抜歯と扁桃腺切除しか知らず。

そう言はば三十數年前、繼續する腹痛を訴え、職場の先輩の紹介にて東大病院の消化器内科部長に診察してもらひし折、膽泥症なれば膽嚢の摘出手術勧めせられき事思ひだす。二週間の入院といふ話にて、前線部隊に勤務したる吾は、これはトンデモナイと逃げ歸へざるを得ず。その後膽石は長年サイレントなりき。

東大病院の醫師は我職場先輩の大學の同級生にて、十年前に食道がん患ひし先輩に對し自分の後輩の日本有數の外科醫に依頼し十三時間におよぶ摘出手術施行せし事思ひ出す。先輩に「數日前より腹痛激化したるる事話し、主治醫紹介せられたり」と電話にて懇願。早速その名醫にメール送信す。名醫たまたま手術執刀し七時頃終へ、病院に在席にて、「入院の準備をし、即刻病院へ来るやうに」との指示を給はりき。

我家の猫入院させ、母のケアマネジャーに見守り依頼し、午後十時前に虎ノ門の病院へ到著す。醫師は若き外科醫伴ひ、緊急處置室にて吾を迎へ入れ、早速超音波検査を施行。「思ひし程病狀深刻に非ず。しかれども明日手術なり」との診断なりき。CT等の検査終わりしは午前零時半、抗生劑と痛み止めの点滴を腕に入れ、漸し激痛より解放さる。翌朝はMRI等の検査更にあり、午後四時よりの手術決まる。手術中のリスクにつきて醫師より説明されき。膽のう極めて炎症しをり、摘出の際他の臓器に癒著したる場合、そこに穴開きし可能性ありてその處置等、聞きたる内に段々と畏さを覺えき。所謂腹腔鏡手術となりたるが、最悪の場合、開腹手術となる事も合わせて説明あり。しかしながらもう俎板の鯉なれば、覺悟しき。

（續きは九月號に掲載豫定）

（平成二十八年十一月七日受附）